

大学入学前教育としてのレポート作成授業の可能性 —留学生対象の日本語集中講座の実施報告から—

小畑 美奈恵・三谷 彩華・陳 曦

キーワード：アカデミック・ジャパニーズ，アカデミック・ライティング，アカデミック・スキル，課題遂行，レポート評価

1. 講座実施の背景と本稿の目的

早稲田大学では、韓国指定校推薦入試制度に基づき、韓国有力外国学校である指定校13校から、政治経済学部、文化構想学部をはじめ、7学部で韓国からの留学生（最大91名）を受け入れている。受け入れた学生のうち、日本語能力試験N1に合格していない学生、CJL レベルチェックテストでレベル7の点数（86点以上）、日本留学試験「日本語」（記述を含まず）において260点以上を取得できていない学生は、学部入学前の春休み期間中に早稲田大学日本語教育研究センター（以下、CJL）が開講する日本語集中講座の受講が義務付けられている。本講座を受講することにより、学部の授業を問題なく受講できる日本語力に達したとみなす。本講座の講師はCJLの助手・助教が担当することになっている。なお、2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、韓国での各試験の実施が中止となったこともあり、日本語能力についての証明ができないという背景にあった。また、同入試制度は2021年4月入学を最終実施年度とし、2022年以降は募集を停止していることが決定しているため、本実施報告も最終年度の報告となる。

本稿では、上記背景により実施した日本語集中講座について、授業設計から授業評価アンケートまでの経緯と成果、課題を大学入学前の日本語教育実践として報告する。

2. 講座実施までの経緯と授業概要

2-1. 講座実施までの経緯

講座実施までの流れは、(1) センター所長、事務長と助手・助教で講座の方針や実施方法の検討、(2) 開始日程や実施形態などの確認と希望する講座内容の聞き取り、(3) 受講学生（以下、学生）の要望をもとに、助手・助教間で授業内容の協議、の順で行った。

(1) では、学部への入学前教育として、学部の授業に耐えうる日本語力を身につけることが目的とされた。また、新型コロナウイルス感染症の影響により、留学生は日本に入学できず韓国から授業を受けるため、講座実施方法は、Web 会議システム Zoom で行うこととした。(2) では、受講予定者にメールで希望する講座内容についてヒアリングした。学生からの要望として、①文章の作成能力と表現力などを高めたい、②漢字の学習方法を知り、漢字能力を高めたいという2点が挙げられた。(2) のヒアリングから講座内容を(3)

協議した結果、決定した実施概要を表1に示す。

表1 日本語集中講座実施概要

日 時	2021年3月8日～26日 原則月水金 10:40-12:10 計9回
場 所	オンライン (Web 会議システム Zoom)
対象学生	文化構想学部、政治経済学部に進学予定の指定校 (韓国) 出身の留学生3名
担当講師	CJL 助手・助教 (1～3回: 陳, 4～6回: 三谷, 7～9回: 小畑)
到達目標	1: レポートの書き方の基本を学び、読む人にわかりやすい文章を書けるようになる。 2: 学術的な漢字語彙を拡充し運用能力を高める。

2-2. 授業概要

本講座では、学部の授業に耐えうる日本語力、すなわちアカデミック・ジャパニーズ (以下, AJ) の能力を向上させることを目的とした。AJにも様々な学習があるが、その中でも、学生からの要望があったレポート・論文作成の力を身につけるため、『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』(以下, テキスト)を用いてアカデミック・ライティング (以下, AW) スキルを身につける授業を行うことにした。選定理由は、日本の大学で必要とされる AW について、日本語のスタイル、適切な言語表現、説得力のある内容・構成で書くことについて徐々に段階を踏みながら学ぶことができるようになっていたためである。本講座では、テキストをもとに計画を立て、実施を試みた (図1)。

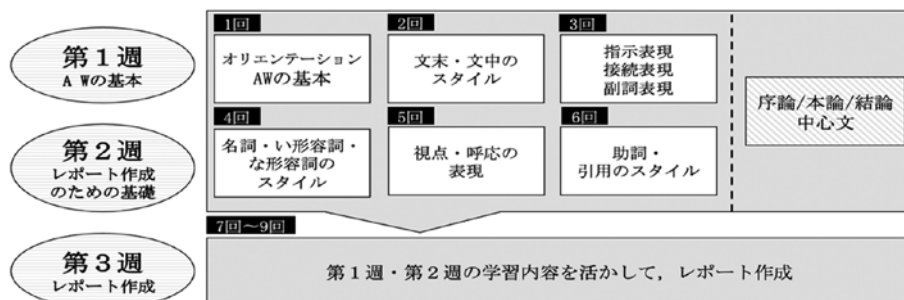


図1 授業計画

テキストは、主な特徴として、①『『アカデミック・スタイル』『言語表現』『内容・構成』の3つの観点から学ぶ』、②「実例から考え、その改善例から学ぶことで推論力を鍛える」、③「幅広いテーマとトピックで知識を深め、論理を組み立てる力をつける」を挙げている。②と③の活動は、AJにおいて求められる問題発見解決のための「日本語による『スタディ・スキル』」(堀井2006:69)の育成にもつながる。テキストでは1学期間から3学期間で学ぶことが想定されているが、本講座では学生の母国での日本語学習期間が長期であった(表4参照)ことから、全9回という短期間でも対応できると考えた。

第1週、第2週は、日本語の文章作成で必須の内容構成・形式・表現を中心に学び、1, 2, 3, 4, 6回の授業の最後に、宿題として担当者が指定するテーマについてのレポート

作成を課した。そして、次の回の授業冒頭にフィードバック（以下、FB）を行い、「レポート評価基準表」に自己評価を記入してもらった。レポートのFBやテキストの課題を行う際は、学生が自ら発言するように工夫をした。レポートの課題名を表2に示す。

表2 課題一覧

第1回	「新聞や雑誌は必要かどうか」に関する意見を500字程度書く
第2回	「日本らしいと感じるものとその理由」をテーマに800字程度書く
第3回	「テクノロジーをめぐる問題」をテーマに800字程度書く
第4回	「教育をめぐる問題」をテーマに800字程度書く
第6回	「興味のあるニュースについて紹介し、自分の意見を書く」をテーマに800字程度書く
第7回	第6回課題「興味のあるニュースについて紹介し、自分の意見を書く」を修正
第8回	ク
第9回	完成レポート

レポートは授業担当者が表3の「レポート評価基準表」に照らし合わせ、添削して返却した。なお、評価項目は、テキストのループリック表（pp. 162-165）に基づいている。第3週は、第1週、第2週で学んだ内容をもとにレポート作成を行い、講座最終日（3月26日）に、講座内容に関するアンケートを実施した。

表3 レポート評価基準表

【内容構成】	【テーマと主張】 テーマと主張がはっきりしていてわかりやすい 【根拠】 理由がはっきり説明されている 【論理構成】 序論、本論、結論のバランスがいい
【言語表現】	【正確さ】 日本語表現（文法、文型、語彙、表記）にまちがいがいない 【適切さ】 アカデミック・ライティングに適切な表現（普通体、かたい表現）が使われている
【形式】	【書式】 フォーマット、分量、参考文献リストなどの指定が守られている

3. 活動の実践例

本章では、第1週から第3週までの授業実践を述べる。なお、学生が作成したレポート等の成果物及びアンケートの使用に関しては、授業後に学生にメールにて個別に連絡を取り、3名中2名から使用の許可を得た。次項以降の実践例及び講座後アンケート調査に記載したのは、許可を得たユンさん（仮名）、リさん（仮名）のものである。

3-1. アカデミック・ライティングの基本

本節では、第1週に行った、オリエンテーションとAWの基本（主に文末・文中のスタイル、指示表現・接続表現・副詞表現）の確認について述べる。

第1回目の授業では、まず授業の到達目標、授業概要、授業スケジュール、使用教材と一緒に確認した。そして、アイスブレイクとして、自己紹介（名前（漢字、意味）、出身、

好きな食べ物、日本で行きたいところと理由)の時間を設けた。なお、「この講座を通してどうなりたいか」も聞いた(表4参照)。

表4 受講学生の日本語学習期間と講座に対する希望

項目 名前	日本語学習期間	この講座を通してどうなりたいか
ユンさん	高校3年間	日本語らしい日本語を話せるようになりたい。日本で問題なく生活できるようになりたい。
りさん	中学校1年間+高校3年間	日本語で文書を書くとき、もっと上手になりたい。

その後、これまでに日本語でどのような種類の作文を書いたことがあるかを聞いた上で、小論文とレポートの違いを確認した。また、最初の力試しとして、テキスト第1課の「新聞や雑誌は必要かどうか」に関する3つの文章について、文体、接続表現・指示表現・文末表現、内容・構成に注目し改善する練習を行った。その上で、学生に考える時間を与えてよりよい文章の条件を考えてもらった後、【内容構成】、【言語表現】、【形式】という3つの評価の観点から提示し、レポート評価基準表の認識を共有した。

授業の最後には、振り返りを行うようにした。振り返りでは、アカデミック・ライティングの基本として知識を身につけたかどうかを確認するため、授業で学んだことについて、「既知していたこと」と「知らなかったこと」を軸に話してもらった。第1週の振り返りでは、受講学生がアカデミック・ライティングの【内容構成】や【言語表現】についてある程度の知識を既に有していたことが明らかになった。一方で、アカデミック・スタイル特有の客観的な書き方といった表現や段落の最初のスペースの数等の形式等知らないものも多々あることも明らかになった。

3-2. レポート作成のための基礎

本節では、レポート作成のための基礎を身につけるために行った、宿題のFBと授業中の課題の進め方について述べる。宿題のFBは、毎回の授業の冒頭に、次の手順で行った。まず、学生が互いの作文を読み、①序論、本論、結論がどのように構成されているか、②テーマ、主張、根拠はどこに書かれているか、③日本語表現で不適切な箇所はないかを確認してもらった。①②はレポート評価基準表の【内容構成】、③は【言語表現】にあたる。【形式】については、第1週に学んだ形式・分量が守られていたため、問題としなかった。次に、教師も含め、各作文のFBを口頭で行った。作文の表現の細かな箇所の指摘については、教師が次回の授業までにWordのコメント機能で指摘し、返却した。

全体のFBでは、学生の作文を画面上で共有し、【内容構成】、【言語表現】について確認した。【内容構成】にあたる①②に関しては、第1週で学んだ作文の構成がよく反映されており、書き手と読み手で内容理解の齟齬は起こらず、スムーズに進められた。しかし、【言語表現】にあたる③に関しては、覚えきれていないアカデミック・スタイルのミスがいくつか見られた。学生が気づかないミスは、教師がハイライトを付け、気づきを促した。講座の開始当初は遠慮がちであった学生が、回を重ねるごとに的確な指摘ができる

ようになったが、アカデミック・スタイル等の【言語表現】の指摘が多く、【内容構成】についての質問、指摘は見られなかった。本講座の第1週、第2週の課題は800字以内と字数が少なく、構成が比較的複雑にならないことも理由として考えられるが、長い文章の場合に、【内容構成】についての指摘ができるかについては、懸念が残った。【内容構成】の学生によるFBについては今後の課題である。

授業中の課題については、先に示した図1の学習項目について、まず、第1週・第2週ともにテキストの「Step1・2の進め方」(p.7)に沿って、①その回で取り上げるトピックについて簡単に話す(「書く前に」)、②テキストの課題(「考えよう」)を学生間で行う、③課題について、教師がFBをする(「改善例」)、④テキストの練習問題をする(「表現例」)、⑤宿題の課題作文についての説明をする(「書いてみよう」)といった順で進めていった。

テキストの「考えよう」では、各回の学習項目に合わせた作文の実例が載っており、その作文の改善点を指摘するという活動を学生間で行った。課題を行う際には、教師はカメラオフ・ミュートにし、学生だけの場を作るように努めた。講座開始時は、アカデミック・スタイルというものに実感がなかったようで、あまり意見が出なかったが、各回の学習項目で少しずつアカデミック・スタイルの表現が蓄積されていったためか、第2週の終盤は、積極的に、また、理由付けもしながら修正ができるようになり、【言語表現】に関しての能力向上に手ごたえが感じられた。ただし、【内容構成】に関しては、第1週・第2週の計6回の授業では時間の制約上、扱いきれなかったように思う。

3-3. レポート作成

本節では、第3週に行ったレポート作成の過程について述べる。第3週では第6回目の課題レポートを修正し完成させた。ここでは事例として、ユンさんが書いたレポート「コロナ禍におけるプラスチックごみの現状と日本企業の取り組みについて」を取り上げ、レポート評価基準表の【内容構成】、【言語表現】について、クラス内でそれぞれどのようなことを検討したかについて述べる。なお、ユンさんの実際の記述部分の引用はゴシック体で示し、括弧付きの数字と下線は筆者が付した。

3-3-1. 内容構成

【内容構成】は、テキストに沿って「動機(はじめに)」「分析」「考察」の3つの項目で書くことが指示されていた。「動機」と「考察」部分において、ユンさん自身の問題意識と主張が明確になっていった過程について述べる。

韓国では、近年、世界中でプラスチックごみが環境に与える影響が問題となっていること、新型コロナウイルス拡大により、飲食店で食べるのではなくテイクアウトの需要が増えたことで、家庭ごみ、特にプラスチックごみが激増したことから、プラスチックごみをできるだけ減らそうという意識が高まっているという。これらを踏まえ、ユンさんはレポートの冒頭に「動機(はじめに)」として次のように記述している。

本レポートでは、コロナ禍以来プラスチックごみの環境問題を企業と消費者がどのよ

うに取り組んでいるのかに関する記事を紹介したい。なぜこの記事を選んだかという
と、コロナ禍で大きく変化した我々の生活のなかで (1) 環境問題を少し後回しにし
ている傾向があるのではないかと思われたからだ。 (第7回目提出レポート)

企業と消費者の環境問題の取り組みを取り上げた記事の選定理由として、(1) を挙げ
ているが、クラス内で「なぜ後回しにはしてはいけないか。そこにユンさんの問題意識が
あるのではないか。」と、選定理由の背後にある問題意識を掘り下げようとする指摘が出た。
そこで、ユンさんは次の文章を追加した。

現在、コロナ禍によって積み上がったプラスチックごみを (2) 日本の企業や社会は
どう向き合って解決しているのかと考へ、この記事を選択した。この記事をもとに、
(3) 企業の動きにそって消費者はどう意識を変化すべきかに関して考察する。
(第8回目提出レポート)

追加された文章を見ると、(2) という、コロナ禍によって増加したプラスチックごみ問
題について、日本の企業や社会が解決すべきである、というユンさんの問題意識が現れて
いる。さらに、(3) という考察の視点も示された。これは、消費者である自分自身はどう
向き合うかという、プラスチックごみ問題を我が事として捉える主張が出てきた。この主
張を受け、考察部分には次のように記述された。

この記事をもって (4) コロナ禍の中でも環境問題を解決するため様々な努力をして
いる日本の企業の状況が分かる。あとは消費者の分である。いくら企業が先立って環
境問題に取り組んでいるとしても、(5) 消費者が意識を変化しなければ無用だろう。
新型コロナウイルスが流行しているため、環境問題を度外視しがちな状況だが、(6)
企業の動きにそって個人まで協力すればより容易にプラスチックごみを減らすことが
できるのではないか。 (第8回目提出レポート)

ニュース記事から 日本の企業の状況 ((4)) を示し、企業の取り組みを確認した上で、
(5) と消費者に視点を移し、消費者個人が意識を変える必要性 ((6)) を主張している。

3-3-2. 言語表現

言語表現では、引用について取り上げる。課題では、興味のあるニュースについて引用
しながら紹介することが求められていた。ユンさんが引用したのは、『NHK NEWS WEB』
の「とにかくゴミを減らしたい」(2021年2月25日掲載) というNHKの経済部記者、吉
田稔氏がまとめたインターネットニュースの記事であり、同記者がデータを引用しなが
ら、テーマに沿って書いたものである。ユンさんは、この記事の中にあるデータを引用し
たり、記者の主張や見解を引用したりした。ここでは、引用部分について記者が調べて引
用しているのか、記者自身の主張なのかが不明であった事例について述べる。

記事では、日用品チェーン大手の良品計画が始めたプラスチックごみの削減を目指した

「量り売り」の取り組みについて、ユンさんは次のように引用している。

記事は、無印良品は「量り売り」を始めたという。食品をグラスケースに入れて並列し、消費者がお持ち帰りするとき、紙袋に必要な量だけを購入してもらうことで、無駄な買い物、不必要なゴミを減らそうと述べている。インタビューでは、「企業としてプラゴミの削減に取り組むことはもちろん『小売り』という業態としては、お客様にプラゴミ削減の場を提供し、買い物を通して環境への意識高めてもらう機会を提供することが大事なんです」と主張している。 (第7回目提出レポート)

まず、良品計画の「計り売り」の取り組みについての説明部分であるが、「述べている」と書くことによって記者自身の主張のように読めてしまう。また、突然「インタビューでは」から始まり「と主張している」と記述されている。誰に対するインタビューで、誰が主張したのかが不明である。この点について、クラス内で元の記事を確認したところ、記事では「無印良品」の計り売りの取り組みについて、良品計画の社員であり商品開発担当者榊かおる氏にインタビューを行っていることがわかった。これらを踏まえ、ユンさんは次のように修正した。

記事は、無印良品は「量り売り」を始めたという。食品をグラスケースに入れて並列し、(中略) 不必要なゴミを減らそうということである。良品計画の商品開発担当者の榊かおるさんは、(中略) と主張している。 (第8回目提出レポート)

主張と誤解されるような「述べている」から、記者が調べたことを引用する表現の「ということである」に変わった。さらに、インタビュー部分は「良品計画の商品開発担当者の榊かおるさんは」と主語が追加された。

以上のように、第3週では、ユンさんのレポートをめくり、レポート評価表の【内容構成】【言語表現】の観点から検討し修正していった。検討の過程において、ユンさん自身の問題意識と主張が明確になっていく過程がみられた。これは、テキストの特徴である「論理を組み立てる力をつける」(伊集院・高野 2020) ことにつながったといえよう。

4. 講座後アンケート調査と考察

本講座最終日に、本講座の目的を改めて説明した上で、1. できるようになったこと、2. 難しかったところ、課題(もっと勉強したいところ)、3. その他、日本語集中講座の感想について自由記述形式でアンケートを実施した。以下に結果をまとめる。

1. 「できるようになったこと」として、引用表現、接続表現等がアカデミック・スタイルで文章が書けるようになったこと、課題を行いながらアカデミックな表現として漢字語を活用できるようになったこと、「はじめ・なか・おわり」の3つを学び、文の構成が上手になったことが挙げられた。これはテキストの特徴①「『アカデミック・スタイル』『言語表現』『内容・構成』の3つの観点から学ぶ」の効果だといえよう。また、「課題を遂行

しながら多様な漢字語を使用したし、フィードバックを受けながら正しいと思った表現が不自然な表現だという点を学びながら役に立った。」という感想からは、特徴②「実例から考え、その改善例から学ぶことで推敲力を鍛える」の効果が窺える。

2. 「難しかったこと、課題（もっと勉強したいこと）」としては、データの出典を明らかにしたり引用表現を主語によって変えなければならないこと、作文で自分の主張に対する反論を考えなければならないこと、アカデミック・スタイルにするために漢字語を使うこと、パソコンで漢字を打つことが挙げられた。本講座では、扱う学習項目が多く、項目に軽重をつけずにスケジュールを組んだため、特に難しいとされる引用表現に十分な時間を割くことができなかった。また、漢字語彙に関しても、同様の理由から課題文章の中で出現したものを導入したため、漢字にあまり馴染みのない学生にとっては難しかったようである。漢字の時間を個別に設ける等、学生に合わせた設計が必要である。3. 「その他、日本語集中講座の感想」としては、短時間でライティング能力が上がったことが有益であったこと、さらに今後の学部の授業に対する意欲が挙げられた。

5. まとめ

本稿では、伊集院・高野（2020）『日本語を学ぶ人のアカデミック・ライティング講座』をもとに実施した留学生の大学入学前教育実践を報告した。本テキストの内容構成面、言語表現面、形式面という3つの文章の評価観点は、自他の文章を評価・改善する際に有用であった。そして、これらを知識として学ぶだけではなく、学生自身がテキストの作文を改善するという課題や、自身が立てたテーマについてクラスメートからFBをもらいながら推敲しレポートを完成させるという過程を通して、AWスキルの上達を実感できたといえよう。また、これらは前述の「スタディ・スキル」の育成にもつながったと思われる。

今後も様々な実践を積み重ねていくことで留学生の大学入学前教育を充実させていきたい。

参考文献

- 伊集院郁子・高野愛子（2020）『日本語を学ぶ人のアカデミック・ライティング講座』、アスク出版。
- 堀井恵子（2006）「留学生初年次（日本語）教育をデザインする」門倉正美・筒井洋一・三宅和子編『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房、pp. 67-78
- 吉田稔「とにかくゴミを減らしたい」『NHK NEWS WEB』2021年2月25日
 <<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210225/k10012884911000.html>>（2021年9月24日閲覧）

（おばた みなえ、早稲田大学日本語教育研究センター）
 （みたに あやか、江戸川大学国際交流センター）
 （ちん ぎ、早稲田大学日本語教育研究センター）